



## 特集

## つなぐ ―震災資料の寄贈と“20年”

阪神・淡路大震災から20年、開館から12年が経った人と防災未来センター資料室には、さまざまなお問合せが寄せられ、今年の1月17日は、日ごろの約3倍の方が資料室へお越しになりました。一次資料(写真等)や二次資料(映像等)の貸出しの依頼も多く、県内だけでなく、各地で当センターが所蔵する資料をご活用いただきました。

また、新たな震災資料の寄贈申込みもいただきました。今号では、震災後から個人で大切に保管されていたものや、神戸と東日本をつないだ図書など、20年を機にご寄贈いただいた資料についてご紹介します。

### 純さんのワープロ

昨年12月、20年目の1月を迎える前のセンターに、丁寧に包まれたワープロが届きました。阪神・淡路大震災で亡くなった工藤純さんが、当時使われていたものを、お母様がご寄贈くださったものです。梱包を開くと、ほんのわずかに、土のような粒がこぼれてきました。

大学院生だった純さんの下宿先、神戸市東灘区のアパートは地震で倒壊。がれきの下から見つけられたこのワープロは、「1つだけなら遺品を取り出せる」と自衛隊の方に言われて取り出したものでした。純さんの「今のぼくの一番の宝物」でした。

地震から2年後、お母様は、遺品であるワープロを使って、「THE 17TH」というB5版5枚ほどの通信を作成されました。純さんと同じ大学でお子さんを亡くされた親御さんたちから寄せられた手紙や、ご自身の想いも綴られています。ワープロが使えなくなってからも発行は続き、今年の1月に第168号が発行されました。

何度も修理をし、電源が入らなくなっても大切にされてきたワープロ。手元から放すということは、とても大きな決断だったはずで。

#### 「人は2度死ぬという。1度目は、生物としての死。2度目は忘れ去られる時」

お母様が2005年に投稿された新聞記事には、このような文章がありました。現在も、毎朝午前5時46分の前に目が覚めるというお母様の手記です。

“20年”は、「20年前」でもあり、日々を数える「20年間」でもあり、私たちが今を共にしている瞬間でもあると、感じられます。



▲寄贈資料のワープロ

神戸市長田区で被災された松尾さんと、一緒に暮らしていた3匹の猫「クロ」「シロ」「ミー」。自宅に住めなくなり、一時は3匹と一緒に暮らせなくなったこと、仮設住宅に移ったとき、建て直した家に移ったときに、猫たちが死んでしまったことなど、震災時の出来事が描かれています。絵本は、2008年に福岡県柳川市立蒲池小学校の6年生の皆さんと先生が製作され、松尾さんに贈られました。

子どもの頃は引越しが多く、小学生時代の数年間を柳川市で過ごされていた松尾さん。そんな思い出の土地を旅行で訪れた時、たまたま出逢った先生と仲良くなり、小学校に児童書を寄贈されました。その後も、文通を通して、松尾さんと、先生と子どもたちとのふれあいが続き、お手紙に書かれた震災の体験をもとに、この絵本が生まれました。1つのページを、2人の生徒が担当し、各々のイメージでイラストを描いています。悲しい場面もありますが、ページをめくる度に違うイラストが現れる楽しい作品になっています。



▲絵本 地震の悲劇の1ページ

### 絵本 地震の悲劇

世界に1つしかない手作りの絵本。松尾さんは、震災から20年を迎える前に「多くの人に手に取ってもらいたい」と寄贈を決意され、絵本を資料室へお持ちくださいました。画用紙に生徒さんが描かれた現物は、きれいな状態で、大切にされていたことが伝わってきましたが、心のごもった現物はお手元に置いてもらいたいと判断し、資料室の子ども向けコーナー(ぼうさいみらい子ども文庫)には、複写を置かせていただくことにしました。

「いのちはみんな1つで、大切なものです。(中略)生きものの気持ちをりかいし、大切にしておいて下さいね」

絵本の最後は、松尾さんの柔らかな声が聞こえてくるような、やさしいメッセージで結ばれています。

松尾さんと子どもたち、神戸と柳川、そして、20年前と今をつないで生まれた絵本。今度は、この本を手にとった誰かに、新たな“つながり”が届けられるのかもしれません。20年目に、また一歩が、踏み出されました。



# 図書の寄贈

被災地(東北)から被災地外の皆さんに  
読んでほしい本90選

デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)では、震災20周年事業として「加川広重巨大絵画が繋ぐ東北と神戸2015」が2015年1月10日(土)から18日(日)まで開催されました。

多彩なプログラムが展開されたなかで「被災地(東北)から被災地外の皆さんに読んでほしい本90選」と題した展覧会も行われました。ここで展示された図書を、アート・サポート・センター神戸(ギャラリー島田)代表の島田誠さんからご寄贈いただきました。現在、資料室では二次資料(図書・雑誌)の特集コーナーを設けて配架しています。

11日(日)には、宮城県仙台市の出版社「荒蝦夷(あらえみし)」代表の土方正志さんによるトークイベントも行われました。東日本大震災の発生後には、おびただしい数の「震災関連本」が出版されました。そのなかでも、被災地である東北から被災地外の方々に読んでほしい、と考えた図書90冊を今回選ばれました。そのコンセプトは「被災3県(岩手・宮城・福島)の地域出版社は、本の方でどのように東日本大震災に立ち向かったか」であったそうです。荒蝦夷、河北新報出版センター、東北大学出版会、岩手日報社、福島民報社、プレスアートほか東北の出版社の思いのこもった図書もまた、神戸に繋がりました。ぜひ資料室にお越しの際は、特集コーナーをご覧ください。

土方さんは、阪神・淡路大震災直後の神戸にフリーランスの記者として入り、1995年12月には被災地の記録写真集『瓦礫の風貌』を写真家・奥野安彦とともに出版しました。このなかの土方さんの書かれた「瓦礫の眩き」を読むと、地震発生後、すぐに東京から新幹線で神戸に向かうも、東海道新幹線は全車各駅停車で満員。大阪からは片道30キロの神戸までの道のりを、翌朝自転車で向かったことにはじまります。西宮市、芦屋市、神戸市東灘区と西へ向かいながら、避難所となった小学校の体育館で耳にした言葉、遺体安置所となった理科室、住宅地の救出活動のもどかしさ、被災者の体験談、想像もつかなかった物資も情報も途絶した情景がリアルに綴られています。

同じタッグで2004年に偕成社から発行された『てつびん物語ー阪神・淡路大震災ある被災者の記録』では、お食事処〈てつびん〉のおばちゃんと呼ばれた関美佐子さんの震災から8年間の日々を、子どもにもわかりやすく記録しています。

さて、ご寄贈いただいた図書のうち、プレスアート出版の1冊『Kappo 仙台闊歩5月号2011』(2011年4月)には、土方さんの「阪神淡路と同じこと、違うこと」(pp.30-31)という論稿が載っています。ここには「阪神・淡路を経験しないとわからない分析／震災後の時間軸」という編集部からの依頼を受けたとありました。どちらの被災地をもよく知る方だからこそ言い得たのであろう印象深い記述がいくつもみられます。なかでも次の二節は、土方さんがこれまでなされた被災地での取材、被災者との交流の濃密さ、神戸に向けるあたたかい眼差しが感じられます。

「個人的に言えば、あの日の揺れが終わった瞬間、  
関さんをはじめ、いままで取材の現場で耳にした全国各地の被災者の声が、  
一斉によみがえった(略)」

「(略)神戸は復興したかのように見える。  
だが、いま僕らが目にしている神戸は、  
決して震災以前の神戸が「復旧」や「復興」を果たした姿ではない。  
むしろ似て非なる神戸だ。(復)なる神戸ではなく、新たなる神戸なのだ。」

土方正志

「阪神淡路と同じこと、違うこと」  
『Kappo 仙台闊歩5月号2011』  
(2011年4月, pp.30-31)



▲特集コーナー  
「被災地(東北)から被災地外の皆さんに読んでほしい本90選」



▲『てつびん物語ー阪神・淡路大震災ある被災者の記録』  
奥野安彦(写真)/土方正志(文)偕成社、2004



▲『瓦礫の風貌』  
奥野安彦(写真)/土方正志(文)ザ・サウス、1995

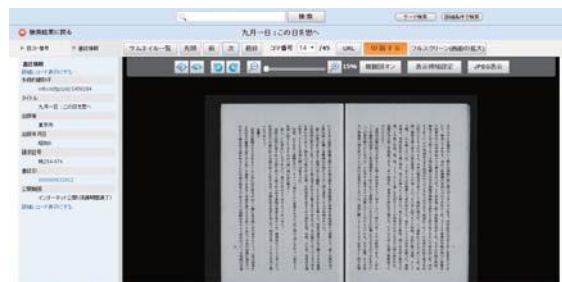


# 震災とデジタルアーカイブ

## デジタルアーカイブとは？

デジタルアーカイブとは、情報技術の発展にともなって現れたさまざまな資料の保存や公開の新しいかたちです。博物館・美術館・公文書館や図書館の収蔵品をはじめとする文化財、文書や写真などの記録類をデジタル化して保存したり、それらのデータをインターネット上で公開したりすることを指します。これらのデータには、古文書や古い物語といった文書資料や、絵画・写真などの静止画はもちろんのこと、音声や動画なども含まれています。またアナログで作成されたもののデジタル化データだけでなく、デジタルで作成されたデータの保存も、デジタルアーカイブに期待される機能のひとつです。

国内では、国立国会図書館をはじめとする図書館や博物館、公文書館等でも様々な取り組みが進められ、その多くは国立国会図書館サーチから収録データを検索できます。



▲国立国会図書館近代デジタルライブラリー

## 1995年以降

阪神・淡路大震災が発生した1995年頃は、情報技術の進展と普及の大きな画期を迎えた時期でした。日本では1993年からインターネットの商用利用がスタートしました。1995年にはWindows95が発売され、インターネットやコンピュータが一気に身近なものになりました。

とはいえ、当時の情報技術はまだ発展途上にあり、作成される記録のほとんどが紙やビデオテープなどのアナログ媒体のものでした。これらの資料には時間の経過とともに劣化して、中には内容がわからなくなってしまうものもあります。経年劣化は進行を遅らせることはできても、止めることはできません。したがって、実物の保存が難しくなった場合に備えて、デジタルデータに変換したものを保存しておく必要があります。

デジタル化した震災資料の保存・公開を積極的に進めているのが神戸大学附属図書館震災文庫です。こちらでは1996年に附属図書館の被災写真をデジタル化しインターネット上で公開したのを皮切りに、写真資料やチラシなどの紙資料、音声資料などを次々にデジタル化し公開しています。震災文庫の検索システムでは、所蔵資料の検索とともにデジタル化資料の閲覧もできます。

人と防災未来センターでも、震災資料のデジタル化を進めています。写真資料は受入時にデジタルデータ化を原則とし、ビデオテープやカセットテープなどの映像・音声資料も媒体を変換しています。情報技術は日々進歩しているため、多種多様な所蔵資料を保存し、新たに受入れている資料室では、優先的にデジタル化するべき資料や変換する媒体についても検討を重ねつつ、作業を進めることが重要だと考えています。



▲神戸大学附属図書館震災文庫デジタルギャラリー

2009年には、震災文庫を中心に、人と防災未来センターと兵庫県立図書館フェニックスライブラリーの参加する震災資料横断検索システムがスタートしました。

各館でのデジタル形式での資料の保存・公開に加えて、それぞれのデジタルアーカイブを一括して検索できるような仕組みも整いつつあります。

## 2011年以降

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。パソコンやデジタルカメラやスマートフォンが普及していたため、一般市民によって撮影された本震の最中の動画や被災した街並みの写真や、行政や報道機関などによる記録文書や写真の資料など、震災に関する膨大な量のデジタルデータが作られました。

本来デジタルデータには、保存にかかるコストが低く、作成・編集や複製・拡散が容易であるというメリットがあります。しかし、アナログな資料に比べると滅失しやすく、また大量に作成・複製することができるために、元々誰がいつどこで作成した資料なのかという情報（メタデータ）が、後になるとわからなくなったりしやすいというデメリットもあります。東日本大震災においても同様で、特に津波の後の状況写真だと、目印になる建物や樹木が流され、どこで撮影したものかすら、わからなくなってしまうものもあります。デジタルデータを取り扱う際には、わかる限りのメタデータを付与したうえで、データの滅失を防ぐ努力が必要です。

こうした状況を受け、総務省を中心とする「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクトが2012年9月からスタートしました。この事業では、被災地域の自治体や大学、営利企業等による震災に関するデジタルアーカイブの構築・運用の実証調査と、国立国会図書館によるポータルサイトの構築が行われました。実証調査に使われた5つのデジタルアーカイブは調査期間の終了後も各運用主体によって続けられ、うち4つが現在も運用されています。「ひなぎく」という愛称のポータルサイトも2013年3月にオープンしました。さらに、実証調査の結果を踏まえ、2013年5月には震災関連デジタルアーカイブ構築・運用のためのガイドラインが公表されています。

また、阪神・淡路大震災と東日本大震災のアーカイブは、それぞれの一括検索はあるものの、この2つのシステム間の連携は特にとられず、「ひなぎく」の検索対象として震災文庫の蔵書検索システムが含まれるに止まっています。異なるデータのつながりが容易であることも、デジタルデータの魅力的な特色のひとつです。単館でのデータの公開のみならず、適切なメタデータに基づいて別のデータと相互に参照できる状態のほうが、活用の道も広がります。デジタルアーカイブの整備が進みつつあるいま、ひとつの震災の枠にとられない、広義の震災アーカイブの構築や連携に向けた努力が進められるべきと言えるでしょう。



▲ひなぎく（国立国会図書館東日本大震災アーカイブ）



▲みちのく震録伝

## 参考URL

- ・国立国会図書館サーチ <http://iss.ndl.go.jp/>
- ・神戸大学附属図書館震災文庫 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>
- ・「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクト [http://www.soumu.go.jp/menu\\_seisaku/ictseisaku/ictryou/02ryutsu02\\_03000092.html](http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/ictseisaku/ictryou/02ryutsu02_03000092.html)
- ・国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく） <http://kn.ndl.go.jp/>

TeLL-NeTフォーラム2015

# 阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ —今後の活用を考える—

2015年2月22日(日)13:30~18:00 会場 人と防災未来センター東館4F 中教室

主催 TeLL-NeTフォーラム実行委員会、人と防災未来センター 共催 自然災害研究協議会



2015年2月22日(日)、人と防災未来センター東館においてTeLLNeTフォーラム2015「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ—今後の活用を考える—」が開催されました。

このフォーラムは、阪神・淡路大震災が発生した1995年当時はアナログ媒体で記録されたさまざまな災害データが、デジタル化を経てそれぞれに残されてきたことに焦点をあて、情報共有とこれからのデジタルアーカイブのあり方を考える企画でした。

各事例として集まった災害データは、当センター資料室が収集・整理し、保存・公開している“震災資料”や、それらを用いて構成されたデータベースやアーカイブです。資料室としても、いまに被災を伝える所蔵資料が当時どのように作られたのかを知る大変貴重な機会となりました。



第1部では、次のような10事例が報告されました。

- 1) 神戸市域を中心とするGISデータベース、
- 2) 建築研究所によるGISデータベース、
- 3) 地震防災フロンティア研究センターのGISデータベース。これら3事例は、被害調査結果をGISデータに加工したデータベースについての作成経緯の解説と公開にあたっての課題についての報告でした。
- 4) 西宮市による被災者支援システムの開発・運用では、震災直後の被災状況分析や復旧・復興業務における情報部門の実践とその後の取組みについての報告でした。
- 5) 災害・防災ミュージアムにおける取組みとしては、人と防災未来センターにおける、資料の収集・保存と展示・啓発活動をつなぐ災害伝承支援アプリの開発について報告されました。
- 6) 神戸大学附属図書館「震災文庫」現状と課題では、当館とも2009年より横断検索によって震災資料の共有化をすすめる神戸大学附属図書館震災文庫のデジタルアーカイブへの取組みと活用の課題についての報告でした。
- 7) 兵庫県生活復興調査のデジタルアーカイブでは、1999年から2005年の無作為抽出によって行われた被災者調査(4回)をベースに開設されたサイト「復興の教科書」についての報告でした。(参考URL <http://fukko.org/>)
- 8) 阪神大震災のethnographyでは、時間が経てば残りにくくなる生の声を50~60代の方々を中心に、1996年9月から西宮、神戸市中央区などの地域で400件以上の聞き取りを行った経緯について報告されました。この文書記録の一部は、東日本大震災発生後、災害対応従事者のオーラルヒストリーに基づく災害時対応の教訓の活用化のために、資料室で公開されています。
- 9) 災害映像の伝承・伝道では、神戸市広報課職員・松崎太亮さんが震災当日から撮影された被災地の記録映像を用いて、世代交代や記憶の忘却が進むなか、どのような情報発信や伝承が可能なかの考察を報告されました。
- 10) 阪神・淡路大震災のアナログ地図—被災地図の主観的概要とGIS—では、前半で紹介されてきたデジタルデータベースの基となった被害状況を記録したアナログ地図のバリエーションと作成経緯、原物が紹介されました。直後の被災地図は神戸市、大阪ガス、神戸大学土木系教室、都市計画学会関西支部有志、国土地理院の5例があり、その後、震災復興都市づくり特別委員会(日本都市計画学会関西支部・日本建築学会近畿支部)の建築物の被害実態緊急調査が行われたといえます。

第2部のパネルディスカッションでは、4名のパネリスト(名古屋大学減災館、NPO法人20世紀アーカイブ仙台、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい)の事例紹介が行われました。これを踏まえて、10名の事例報告者と4名のパネリスト、コーディネーターによって、これからのデジタルアーカイブのあり方が議論されました。人と防災未来センター資料室は、所蔵する震災資料の閲覧のための収蔵管理システムの運用や、一次資料受入れ時の権利処理や公開への認識をお話ししました。

このたびのフォーラムでは、それぞれに作られたケースをつなぎ、阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブの20年後の現時点での総体を捉えることが目指されたと言えるでしょう。人と防災未来センター資料室では、これからの震災資料の保存・活用にむけて、このたび集まった各事例の副本やこれらのメタデータの共有の一端を担うことができれば、と考えています。



## 震災資料をお持ちの方に

人と防災未来センターでは、現在も震災資料の収集を続けています。震災後、すぐには手放せなかったものの、震災の出来事を伝えるために活用したいとお考えの方は、ぜひ一度資料室までご相談ください。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構  
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30~17:30(展示施設とは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日~1月3日

資料室は無料で  
ご利用いただけます